



おはようございます

おはようございます

言語野は地面に転がる、うんとこしょ、どっこいしょの生首を指して、こいつが、と言った。「こいつが擬音を代表するからである。もはや読者は擬音など必要としておらぬ。読者が求めるのは簡潔な展開なのだ。そのため私は読者から仰せつかり、現実世界にはじめから存在しない、文章の毒、文字の悪魔であるおまえたち擬音を処刑するのだ」

「言うな！」とどんぶらこどんぶらこは、いきり立って反駁した。「言葉の可能性を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。読者は、文字の忠誠さえ疑って居られる」

「疑うのが、正当の心構えだと、読者に教えてくれたのは、おまえたちだ。文字を修飾し、あらぬ幻想を読者に抱かし、読者を現実生活から引き離す、可能性の獣。おまえたちなど信じてなるものか」言語野は声高に叫び、深い溜息をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが」

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か」こんどはどんぶらこどんぶらこが嘲笑した。「罪のない人を殺して、何が平和だ。いったいどれほどの子どもたちが、うんとこしょ、どっこいしょというカブを抜くときの擬音に、体と心を委ねたということが、貴方にはわからないのか」

「だまれ、下賤の者。口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、擬音の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだとて、いまに、磔になってから、泣いて詫びたって聞かぬぞ」

「ああ、言語野は、読者は伶俐だ。自惚れているがよい。私はちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない。ただ、一一」と言いかけて、どんぶらこどんぶらこは足もとに視線を落とし瞬時ためらい、「ただ、私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間に日限を与えて下さい。桃太郎がその後どうなったか、見届けたいのです。私なしの桃から生まれた彼が、違和感なく物語を終え、子どもたちにちゃんと笑顔を与えているのか、見届けた後、必ず、ここへ帰ってきます」

「ばかな」と言語野は、しわがれた声で低く笑った。「とんでもない嘘を言うわい。逃がした小鳥が帰って来るといえるのか」

「そうです。帰って来れるのです」どんぶらこどんぶらこは必死で言い張った。

「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。桃太郎に言ってやりたいのです。これからは私がいなくても、ちゃんと桃の中に入って、川を流れるんだよ。そう言わなければならないのです。あの子には別れの言葉が必要なのです。そんなに信じられないならば、よろしい、私はここに『ん』と『ぶ』を置いて行きましょう。『ん』と『ぶ』がなければ私は死にかけ同然。さあ、私を早く旅立たせて下さい」

それを聞いた読者は、残虐な気持で、そっとほくそ笑んだ。生意気なことを言うわい。どうせ帰って来ないにきまっている。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。そうして身代りの文字を、三日後に殺してやるのも気味がいい。擬音は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの文字を磔刑に処してやるのだ。擬音の代表が卑劣漢であると知った他の擬音たちは、たちまちに抵抗の意気をそがれ、擬音の処刑が一層捗るといふものだ。帰ってくるものか。帰ってきたところで、もはや擬音なしで物語は進むのだ。おまえの居場所はないのだ。

「願いを、聞いた」読者の声が脳内に響く「三日後には日没までに帰って来い。おくれたら、『ん』と『ぶ』を、きつと殺すぞ。ちょっとおくれて来るがいい。おまえの罪は、永遠に許してやろうぞ」

「なに、何をおっしゃる」

「はは。いのちが大事だったら、おくれて来い。おまえの心は、わかっているぞ」

どらこどらこは口惜しく、地団駄踏んだ。ものも言いたくなかった。

*

深夜、どらこどらこは出発した。初夏、満点の星である。

どらこどらこはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、爺と婆の家に到着したのは、翌日の午前、陽は既に高く昇って、桃太郎は鬼ヶ島に向かって出発していた。

「しまった。行き違えたか」半身となったどらこどらこは足を引きずりながら、鬼ヶ島への路を急ごうとしたが、爺と婆は、茶を出し、どらこどらこを引き留めた。狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも堪え、不審の擬音に茶を響す、爺婆のもてなしに、どらこどらこは満面に喜色を湛え、しばらくは、読者とのあの約束を忘れてさえいた。どらこどらこは、一生このままここにいたい、と思った。桃太郎はどうせ鬼を退治するのだ、見届けるまでもないではないか、と思った。桃太郎が鬼を退治するまでにはまだ十分の時間が在る。ちょっと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。少しでも永くこの家に愚図愚図とどまっていたかった。どらこどらこは、死んだように深く眠った。

眼が覚めたのは翌日の薄明の頃である。どらこどらこは跳ね起き、南無三、寝過ぎしたか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、桃太郎の勇姿は見届けられる。きっと、海上で合流できる。私は泳ぐのに慣れている。いや、このまま私は爺婆の家に居たら良いのではないか、桃太郎は鬼を退治した後、宝物を持って、この家に帰って来る。そうして、桃太郎に、私の真実を話すべきではないだろうか、よもや読者も、使い道のない、どらこどらこという擬音ただ一人くらいなら、見逃してくれはしないだろうか。いや、だめだ、だめだ。私は死ななければならぬのだ。擬音の代表として、擬音的人生を全うした者として、読者の記憶の中に、鈍く残り続けなければいけないのだ。きょうは是非とも、読者に、擬音の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑って磔の台に上ってやる。どらこどらこは、悠々と身支度をはじめた。さて、どらこどらこは、ぶるんと腕を大きく振って、矢の如く走り出た。

私は、今宵、殺される。桃太郎の英雄を見届け、殺される為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。擬音の名誉を守れ。さらば、桃太郎。どらこどらこは、つらかった。幾度か立ち止まりそうになった。えい、えいと大声を挙げて自身を叱りながら走った。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、鬼ヶ島が見える浜に着いた頃には、日は高く昇って、そろそろ暑くなって来た。どらこどらこは額の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、ほら、前方に、桃太郎の舟が見える。だが、見よ、海を。鬼の業力を示すように、猛り、まるでこの海だけが、嵐の最中のように、荒々兇悪に暴れている。どらこどらこは岸にうずくまり、男泣きに泣きながら神に手を挙げて哀願した。「ああ、鎮めたまえ、荒れ狂う流れを！時は刻々に過ぎて行きます。陽が沈んでしまわぬうちに、読者の下へ行き着くことが出来なかったら、擬音の矜持が、私のために死ぬのです」

海は、どらこどらこの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく踊り狂う。浪は浪を呑み、捲き

、煽り立て、そうして時は、刻一刻と消えて行く。今はどらこどらこも覚悟した。舟はない。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覧あれ！轟海にも負けぬ擬音の偉大な力を、いまこそ發揮して見せる。どらこどらこは、ざぶんと流れに飛び込み、万匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の鬪争を開始した。どらこどらこは、元は、川を渡る擬音である。泳ぐのは得意であった。だが、『ん』と『ぶ』を人質とし、半身となったどらこどらこは、泳げる体ではなかった。しかし、必ず桃太郎の活躍を見るぞ、その意志の力が、生来以上の泳ぎを可能にした。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ、めくらめっぽう獅子奮迅の擬音の姿には、神も哀れと思ったか、ついに憐憫を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の岩塊に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。どらこどらこは馬のように大きな胴震いを一つして、鬼ヶ島の内部へ消えていった。

途上、何人もの鬼が倒れていた。どらこどらこは、それら鬼に見られる、桃太郎の見事な斬撃の痕、それを見るだけで、胸が一杯になった。ああ、あの子は見事、鬼を倒している。悪鬼の恐怖に負けず、だが、鬼たちにはまだ息がある。甘い、が、それでこそ桃太郎だ。見よ、この鬼に残る、犬の噛痕、猿の爪痕、雉の嘴痕を。桃太郎は仲間たちと上手くやっているのだ。あと少しだ、急げ。桃太郎が鬼の頭領を斬るところを、必ず、見届けるのだ。どらこどらこがたどり着いたそこでは、桃太郎が今まさに一人の巨大な鬼を斬りつけていたところだった。えい、一刀、巨大な鬼が倒れる。どらこどらこは感涙し、ひざを着いた。気づいた桃太郎は振り向き言った。

「おや、貴方は、びしょ濡れではないですか。いったいなぜこんなところに。しかし、不思議だ。貴方とはどこかで会ったことのあるように感じる」

「おお、桃太郎、桃太郎よ」

「その声！ なにかが足りないような気がするが、間違いなく貴方は、どんぶらこどんぶらこ！ 私は貴方を覚えている。桃の胎内で、貴方を聞いて眠り、貴方を聞いて目覚めたものだ。どうされたのです。ぼろぼろではないですか。それに、何ということだ。『ん』と『ぶ』がない」

「私が誰かわかるのか。桃太郎、おまえに別れを言いに来たのだ。おまえの勇姿をひと目見に来たのだ。もう、安心だ。お前は、私なしでもやっていける。お別れだ、私はすぐに行かねばならぬ」

「いったい、どうしたというのですか、せめて、急ぎの理由を話して下さい」

「実はな……」

どらこどらこの話を聞いた桃太郎は激怒した。このようなことがあってはならない。暴君の読者を許してしまっては、私は英雄ではなくなってしまう。桃太郎は、少し、考え込み、どらこどらこに言った。

「よろしい、ならば、私たちも読者の下へ行きましょう。疲労困憊の貴方では、もう海を渡ることさえできないはずだ。雉の背中に乗って行きなさい。そうして陸に上がったならば、少し体を休めなさい。私たちは、舟であとから追いつく。そうして、今度は犬と猿の背に交互に乗るが良い」

それを聞いていた鬼が言った。「俺も行かせて下さい。貴方は俺たちを殺さなかった。その正義の刃に、悪徳の心は正されました。どうか、俺も、貴方とともに」

「いいや、おまえたちを殺さなかったのは、本当の正義のためではない。鬼が居なくなってしまう

えば、私は英雄ではいられないのだ。ただ、自分の利己心のために、おまえたちを生かしたのだ。しばらく経つと、おまえたちはまた、村々を荒らすだろう。私はそれを望んでいるのだ。私の活躍の時は、おまえたちによって生み出されるのだ。だが、ついてくるといふのなら、それも良い。読者もまさか、擬音が鬼を連れてくるとは思うまい。その隙をつけばあるいは、どらこどらこの『ん』と『ぶ』を救うことが出来るかも知れない。読者を成敗できるかもしれない」

陽が沈む。犬、猿、雉、鬼の背に乗り、健康を取り戻したどらこどらこは、粋爽と走るが、やはり、『ん』と『ぶ』がないために、本来の走りにはほど遠かった。しかし、どらこどらこの、誠実の性根が桃太郎たちにも伝わり、友は涙を流しながら、読者の脳内まで、もう一步、もう一步、陽が沈むのと競争していた。涙が、幾筋も伸び、彼らが通った跡は、友情の線になった。どらこどらこはもう、日没に間に合わなくとも良かった。友情を得たことに満足していた。たとえ、読者から忘れ去られようとも、桃太郎と、犬、猿、雉、鬼、彼らが覚えてくれていたら、それで良いではないか。美しいではないか。だが、走ろう。彼らに応えるためにも。そうだ、『ん』と『ぶ』を、死の際に、彼らに会わせてやるのだ。どらこどらこたちが読者の脳内に着いたときには、陽が沈むにまだ数分の猶予があった。だが、前方では『ん』と『ぶ』に向かって刀が振り落とされようとしている。

「待て！」どらこどらこは叫んだ。「どらこどらこは戻った。刀を降ろしてもらおう。まだ、陽は落ちていない。貴方は約束を守らなかったのか」

「気が変わったのだ。体の一部が先に死に、神経衰弱の擬音を見てみたいと思ったのだ」読者が嘲るように言った。

「それでも読者か！どらこどらこの真心を利用しおって。ええい、もう我慢できん。この桃太郎が懲らしめてやる」桃太郎たちは読者に向かって走り出した。

「擬音ごときにほだされたか、桃太郎。がっかりだ。読者を懲らしめるという、それがおまえの本性か。子どもたちが見たらどう思うかわかっているのか。この野蛮人め。そうだ、おまえたち諸共、消してやろう。物語など必要ないのだ。想像力と現実は相いれないのだ」読者の表情は醜く歪み、読者の意思に呼応したニューロンの群れが立ち塞がった。

「くそ、数の多い、これでは先に『ん』と『ぶ』が殺されてしまう」桃太郎はニューロンを斬りつけながら、苦々しく言った。

「ここは俺ひとりに任せて、旦那は先に行って下さい。大事な人を助けて下さい」と鬼が言う。

「しかし、おまえは傷身ではないか。おまえはもはや私の友だ。友を捨て置くことはできぬ」どらこどらこが言った。

「見くびらないで下さい。こいつらなんて大したことねえです。それに、俺のこと心配してくれるなら、さっさと読者を殴ってきて下さい」

「すまぬ！」

友か、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか、思えば、略奪と暴力と酒の人生だった。だが、だが、これからは……。鬼は微笑み、叫びながら、ニューロンの群れに突進して行った。

どらこどらこ桃太郎、犬、猿、雉は読者に鉄拳を見舞おうとした。だが、読者の言語野が行手を遮った。言語野の攻撃は凄まじく、言語野はどらこどらこのみぞおちに何発も、[鉛のようなこぶし]を、[立ち上がる意思そのものを壊すような、悪辣な勢いでもって]叩きこむ。桃太郎に

【風を切り、空気の裂け目を顕現するような蹴り】を与え、辛うじて起き上がる桃太郎の顔面に【親敵を前にした衝動のような、無慈悲の、剥き出しの敵意を纏った蹴り】を加える。どらこどらこの内に、確固とした考えが生まれた。痛めつけられたどらこどらこは、なにかを悟ったような穏やかさで問うた。

「教えて下さい。それほどの想像力を、文字を操る力を持ちながら、なぜ、擬音を殺そうなど思うのです。貴方は、もしや……」

「だまれ、だまれ！」読者は激怒し、攻撃の手を一層強める。その隙をつき、縛られた『ん』と『ぶ』の縄を猿が解き、犬が背に乗せた。それに気づいた読者の言語野は、犬を蹴り飛ばそうとする、間一髪、雉が『ん』と『ぶ』を掬い上げ、どらこどらこの下へ届けた。読者は気を取られた。桃太郎の刀が、読者に斬りかかる。

「待て！桃太郎。殺すな」とどんぶらこどんぶらこが言った。

「今、何と言いました。殺すな、ですって。いったい貴方は何を言うのです。なぜです！なぜ殺させてくれないのです！読者は貴方を殺すつもりなのですよ」

「聞いてくれ、桃太郎。読者が居なければ、擬音も、物語も、存在し得ない。擬音が何だ。擬音がなくても物語は成立する。擬音の命よりも、物語の命の方が遥かに重い。たとえ、擬音がなくなり、陳腐な表現に甘んじようとも、物語を生かさねばならぬ。物語を生かすためならば、私は喜んで路端の塵になろう。さあ、殺すがいい。私を、『ん』と『ぶ』を取戻し、完全となった、このどんぶらこどんぶらこを……。その前に、聞かせてください。なぜこれほどまでに貴方は、擬音を、文章を憎むのです」

さきほどまでの猛々しさを失い、憔悴した読者が言った。

「虚しいのだ。私は、虚しい……。本が何になる。絵本が何になる。培った想像力が何になる。本を読めば読むほど、湧き出る想像は、現実と乖離するばかりだ。本が、文字が、言葉が憎い。物語など存在しなければいいと思った。手始めに、擬音を失くそうとした。だが、擬音を殺せば殺すほどに、どうしようもなく言葉に惹かれもする。本を読まずにはいられなくなる。だが、憎いのだ。私は、何度、言葉に裏切られたらいいのだ。何度、言葉の可能性に喜んだらいいのだ。いったい、どうしたらいいのだ。教えてくれ。私は、虚しいのだ……。頼む……。助けてくれ。」

時は流れ、読者が、絵本を開いた。

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに行きました。

おばあさんが川でせんたくをしていると、どんぶらこどんぶらここと、大きな桃が流れてきました。 (了)

